



宇津保物語

上

昭和三年七月二日印刷  
昭和三年七月五日發行

有朋堂文庫  
宇津保物語上卷

(非賣品)

編輯者

塚本哲三

印刷兼  
發行者

東京市神田區錦町一丁目十九番地  
三浦捷一

印刷所

東京市神田區錦町三丁目九番地  
有朋堂印刷所

發行所

東京市神田區錦町一丁目十九番地  
有朋堂書店

不許複製

## 緒言

宇津保物語上册の校訂成り、將に緒言を草せんとするに方り、校訂者會、病を獲て筆を援ること能はず、荏苒日を送りて發刊の期正に迫る。乃ち止むことを得ずして、單に校訂に關する用意の大要を記して讀者の參考に供し、其の他の言説は姑く之を他日に譲らんとす。宇津保物語は古來難解の書として傳へられ、其の名徒らに高くして之を讀む者甚だ稀なり。これ其の文の錯簡と卷の順序の錯誤と共に甚だしきに因るものなり。本書は文化二年補刻の刊本を以て底本とし、左記の諸本を參照して、義の通じ易きもの、又は詞づかひの最も穩かなるものを採り、上欄に異同を註せり。但し上欄の甚だ窮屈なるを以て、一々には異同を註せず。これ一には重きを通俗に置く本文庫の主意に拘せられたる也。本書の參照に用ひたる本左の如し。

村田春海校正本

山岡俊明校正本及び小山田與清校正本に據りて刊本を正したるもの。

宇津保物語玉琴（卷三以下） 細井貞雄

契沖校正本、山岡俊明校正本、田中道麻呂校正本、菅原久樹校正本、荻谷望之校正本  
及び古寫本二本に據りて刊本を考へ 異同を抄出したるもの。

宇津保物語新治（卷五以下） 巨勢利和

塙檢校本、久永氏本、土佐家本及び一本に據りて刊本を考へ、異同を抄出したるもの。

久米幹文本

田中道麻呂本、羽倉在滿本、塙檢校本、馬陽本、古寫本及び他の二本に據りて刊本に  
異同を註したるもの。

東京帝國圖書館藏古寫本二本

之を數ふるに、若し一本又は古寫本などと記せるものにして相重複することなくば、本書  
の本文は二十一種の本を以て對校せるものと謂ふを得べし。

順序につきては、はじめ古來の諸家の說に求めて之を決せんとせしに、諸說紛然として適

従する所を知らず。よりて翻つて本書に就きて之を考ふるの寧ろ捷徑なるを思ひ、本文を玩索して事實の前後敘述の筆癖等を精勘し、全く自家の見地によりて順序を一定し、又翻つて之を諸家の説に對照するに、細井貞雄氏の玉琴の順序最も予が順序に近く、其の相異なるは、唯彼は「吹上」の下巻を「祭の使」の前に置けるに、我は「祭の使」を「吹上上」と「吹上下」との間に置けるの一事のみなることを見出せり。

人名はもと殆どすべて假名がきなるを、今讀過の便をはかりて假に漢字を宛て、その文字は大概「字津保物語新治」に用ひたるを其儘に襲用したり。

本書の校正につきては塚本哲三星野亮太郎二氏を煩はしたること多し。爰に記して謝意を表す

大正四年五月病中に記す

校訂者 武 笠 三



# 宇津保物語 上 目錄

|            |     |
|------------|-----|
| 俊 蔭        | 一   |
| 藤原の君       | 九五  |
| 忠こそ        | 一六七 |
| 嵯峨院        | 二〇九 |
| 梅の花笠 一名春日詣 | 二七七 |
| 吹 上 (上)    | 三二一 |
| 祭の使        | 三六九 |
| 吹 上 (下)    | 四三一 |
| 菊の宴        | 四六三 |



あて宮・・・・・・・・・・・・・・・・五五一

初 秋 一名とばかりの名月  
又相摸の節會  
又内侍のかみ・・・・・・・・五八九

田鶴の村鳥 一名沖つ白浪・・・・・・・・六九九

# 宇津保物語

## 俊 蔭

### 概 梗

● 清原俊蔭の生ひ立ち。其の穎悟。● 俊蔭遣唐使に立つ。彼國に漂流す。琴を習ふ。● 俊蔭伐木の響を尋ねて西に行く。阿修羅に遇ひて琴を得。梅檀林の中に琴を弾く。● 俊蔭天女の教に隨ひて尚西に行く。仙人に琴を習ふ。佛、俊蔭等に過去未來の因果を示す。俊蔭彼斯國に還る。● 俊蔭歸朝。源氏の女を娶る。式部大輔兼左大辨に任ぜらる。一女を生む。● 俊蔭琴を所々に奉る。琴の師仕るべき勅を辭す。● 俊蔭三條京極に隱居す。女に琴を習はす。治部卿兼參議に任ぜらる。● 俊蔭夫婦逝去。遺言。家道の零落。孤兒の寂しき生活。● 藤原兼正、父に隨ひて賀茂に詣づ。歸途密に俊蔭女の許に宿す。● 兼正の行方不明。藤原一家の騒動。兼正父母の監視に苦む。● 俊蔭女の幽愁。兼正の悲嘆。● 俊蔭女懷胎。忠實なる老婢。俊蔭女、仲忠を生む。貧居。● 老婢の死去。幼兒仲忠の孝養。天助。● 俊蔭女、仲忠を導きて北山の空洞に移住む。母に琴を習ふ。幼くして琴の妙を極む。● 奇禍。俊蔭女なん風の琴を彈く。● 兼正、琴聲を尋ねて北山に入る。兼正仲忠父子の應答。● 兼正再び北山に入る。俊蔭女を伴ひ歸りて三條堀川の邸に置く。俊

隆女の榮華。④ 仲忠諸藝を習ふ。侍從に任ぜらる。⑤ 五節の試樂に仲忠御前にて琴を彈く。⑥ 兼正相模の還装を行ふ。源正賴、仲忠を強ひて琴を彈かしむ。仲忠仲澄と兄弟の約を結ぶ。⑦ 正賴、其妻六宮に還装の有様を語る。

● 清原俊蔭の生ひ立ち。其の顚悟

〔語釋〕

(一) 母の皇女なるをいふ

(二) 年不相應に

(三) 來聘の高麗の使節に

應接する

(四) かうぶり—元服

(五) 試験場に出でたる

(六) 清原王の子の名

(七) りほう—吏部卿

〔考異〕

(一) 清原の王—清原の大

納言

(二) 七歳なる子—七歳に

なる子

(三) 中臣—なりとみ—み

はら

むかし、式部大輔左大辨かけて、清原の王ありけり、御子腹に男子一人もたり。其の子、心の敏きこと限りなし。父母、「いと怪しき子なり。生ひ出でん様を見む」とて、文も讀ませず、言ひ教ふることもなくしておほし立つるに、年にもあはず、たけ高く心賢し。七歳になる年、父が高麗人に逢ふに、此の七歳なる子、父をもどきて、高麗人と文を作り交しければ、おほやけ聞召して、怪しう珍らしきことなり、いかで試むと思す程に、十二歳にてかうぶりしつ。帝、「有難き才なり。年の若き程に試む」と思ひて、唐土に三度渡れる博士、中臣門人と云ふを召して、難き題を出させて、試させ給ふ。度々登りたる學生の男ども、才有るをのことども、手まどひをして一行の文も奉らぬに、俊蔭は、りほうの文を、い

〔語釋〕

(三)秀ずは進士の下なり。

誤あらん歟

(六)答案

(七)一人子の大切さは眼にまさるをいふ

(八)遣唐使の船

(二三)逆風

〔考異〕

(一)なりぬーなれり

(二)同じ博士ー同じく博士

(四)日たかくー日たかき

同かたきカ

(五)心に随ひてー問ふに随ひて

(九)唐土船ー唐土に船

(一〇)夕のー夕に

(一一)出で立つー出で立つ

(一二)血の涙ー血のナ

●俊蔭遣唐使に立つ。波斯國に漂流す。琴を習ふ

とになく作り出して奉れる時に、一天下の人、皆言ひあざみて、其の度、俊蔭一

人進士になりぬ。又の年同じ博士を召して、秀才の題を賜ふ。校書殿にて日たか

く題を賜ひて、かたく問はる。俊蔭心に随ひて答ふるに、えせぬ事なく、同じく

作れる、對策の思ふまゝに答へたる、對策の文ども、面白く興有り。帝驚かせ

給ひて、即ち式部丞になされぬ、其の程俊蔭がかたちの清らに才の賢きこと、更

に譬ふべき方なし。父母眼だに一二有りと思ふ程に、俊蔭十六歳になる年、唐土

船いだし立てらる。此度は殊に才賢き人をえらびて、大使副使と召すに、俊蔭召

されぬ。父母悲しむこと、更に譬ふべき方なし。一生に一人有る子なり、かたち

身の才人に勝れたり、朝に見て夕の遅なほる程だに、紅の涙をおとすに、遙か

なる程に、相見んことの難きみちに出で立つ、父母俊蔭悲しび思ひやるべし。三

人の人、額を集へて血の涙を落して、出立ちて、遂に船に乗りぬ。

唐土にいたらむとする程に、あたの風吹きて、三つある船、二つは損はれぬ。多

〔語譯〕

(一)法華經普門品に「若有百千萬億衆生、爲求金銀琉璃珊瑚瑠璃瑠璃珠等寶、入於大海、假使黑風吹其船舫、飄墮羅刹國、其中若有乃至人稱觀世音菩薩名者、是諸人等、皆得解脫羅刹之難」

〔考異〕

(二)だに見えぬ―だにも見えぬ

(三)歩き嘶く―歩いて嘶く

(四)ふと頸に―ふと鞍に

(五)林の―ナシ

(六)遊ぶ―遊び居る

(七)日本國王の―日本の王の

(八)同じき皮を―同じ皮を

くの人沈みぬる中に、俊蔭が船は、波斯國に放たれぬ。其の國の渚に打寄せられて、便なく悲しさに、涙を流して、俊蔭「七歳より俊蔭が仕うまつる本尊現れ給へ」と觀音の本誓を念じ奉るに、鳥獸だに見えぬ渚に、鞍置きたる白き馬出來て、躍り歩き嘶く。俊蔭七度ふし拜むに、馬走り寄ると思ふ程に、ふと頸に乘せて跳びに跳びて、清く涼しき林の、梅檀の陰に、虎の皮を敷きて、三人の人並び居て琴を弾き遊ぶ所に下し置きて、馬は消え失せぬ。

畫詞

ことは、三人の人並び居て、琴ひき遊ぶ。

俊蔭林の下に立てり。三人の人間ひて曰く、「彼は何ぞの人ぞ」俊蔭答ふ、「日本國王の使清原俊蔭なり。有りしやうは斯うく」といふ時に、三人の人「哀旅人にこそあなれ。暫時宿さむかし」といひて、竝べる木の陰に、同じき皮を敷きてするつ。俊蔭もとの國なりし時も、心に入れし物は琴なりしを、この三人の人唯琴をのみ弾く、されば、添ひ居て習ふに、一つの手残さず習ひとりつ。



俊

蔭



五

自俊蔭伐木の響を尋ねて西に行く。阿修羅に遇ひて琴を得。桐樹林の中に琴を弾く

〔語釋〕

(五) 琴一つ造るだけの木を獲ん

〔考異〕

(一) 俊蔭—その時俊蔭

(二) 思ふ様—思ふほに

(三) ころち—そこら

(四) 尋ねて—尋ねゆきて

(六) 出し—出して

(七) 年もくれぬ—年をほくれぬ

(八) いさをしき—いさましき

(九) 空につき—雲につき

て。又雲井につき

花の露、紅葉の雪をなめてあり経るに、翌る年の春より聞けば、此林より西に、木を倒す斧の聲、遙に聞ゆ。其の時に俊蔭思ふ、程は遙なるを、響は高し。音高かるべき木かなと思ひて、琴を弾き、文を誦してなほ聞くに、三年此の木の聲絶えず。年月の往くまよに、己がひく琴の聲に響かよへり。俊蔭思ふ様、こよら四つの隅、四つの面を見めぐらすに、此處より離れて山見えす、天地一に見ゆるまで、又世界なきに、琴の音にかよへる響のするは如何なるぞ、此の木のあらむ所尋ねて、いかで琴ひとつ造るばかり得むと思ひて、俊蔭三人の人に暇を乞ひて、斧の聲の聞ゆる方に、疾き足を出し、こはき力を勵みて、海河峯谷を越えて、其の年暮れぬ。又明くる年も暮れぬ。

三年といふ年の春、大きな峯に登りて、見めぐらせば、頂天に付きて嶮しき山、遙に見ゆ。俊蔭いさをしき心、早き足を出して行くに、辛くして其の山に至りて見渡せば、千丈の谷の底に根をさして、末は空につき、枝は隣國にさせる桐の

〔語釋〕

(三)勇猛なる

(五)佛教の六道の中、三善道の最下級、猜忌の心深く闘争を好むといふ

(七)萬劫を経て始めて滅すべき罪、劫は非常に永き時間の稱

(二二)くるくると動かし

〔考異〕

(一)面を見ればほむら燃ゆるが如し。ナシ。一面を見ればほむらたけるが如し

(二)いみじき瀟瀟子ども

いみじき女翁をさなき子どもいみじき女をさなき子ども

(四)いかしきはしたなき

(六)此の木切る音を此の音を

(八)罪の半罪半

(九)食とせよ食にせよ

(一〇)如何に思ひてかいかでか

(一一)輪の如く輪のと

(一二)牙を満を

木を、倒して割り木づくる者あり。頭の髪を見れば剣を立てたるが如し、面を見

ればほむら燃ゆるが如し、足手を見れば鋤蹴の如し、眼を見れば金椀の如くきら

めきて、いみじき嫗、翁、子ども、孫など率て、頭を集へて木を切りこなす。俊

蔭さだめて知りつ、我身は此山に亡しつ、と思ふものから、いかしき心をなして、

阿修羅の中に交りぬ。阿修羅大きに驚きて曰く、「汝は何ぞの人ぞ一俊蔭答ふ、「日

本國王の使、清原俊蔭。此の木切る音を尋ぬること三年になりぬ。今日をもてな

ん此の山を尋ね得たる」といふ。阿修羅怒れる容貌をいたして、阿修羅「汝何により

てか、阿修羅の萬劫の罪の半過るまで、虎狼蟲けらと雖も、人のけぢかきをあた

りに寄せず、山のほとりに翔り来る獸は、阿修羅の食とせよと宛てられたり。如

何に思ひてか、人の身を受けて、汝が此處に來れる。速かに其の由を申せ」と眼

を車の輪の如く見くるべかして、牙を劍の如く喰ひ出して怒る。俊蔭涙を流して

答ふ、あなかしこ、此の山を尋ぬること、烈しき巖燄出るまで、獸のはけし



〔語釋〕

(一)「ほむら」はこむら

(腓)の弱弊

(二)大般若波羅密多經

(二五)上の「あさき」は衍

文にて、心配の深くなら

ぬ前に顔を見せ上の義な

るべし

〔考異〕

(二)脛を―肌を

(三)至り―至りて

(四)尋ね―尋ねて

(五)別れし口より―別れ

しより

(六)昔の犯の深きにより

て―昔犯し罪により

(七)あれど―あれども

(八)父母ありと―父母の

ありと

(九)申すによりて―いへ

ば

(一〇)命を―罪を

(一一)大なる―思ひの

(一二)一生に―一生

(一四)嘆―嘆を

(一六)あひ向へ―あひむ

かへむ―むかへむ

(一七)多くの―ナシ

き中を分け出づる時は、ほむらは炎熱く、劍脛を貫き、惡をふくめる毒蛇に向ひ

て、もとの國より此の國に至り、棲みし林より此の山を尋ね、父母が手を別れし

日より今日までのことを答ふ。阿修羅、「我等昔の犯の深きによりて、惡しき身を

受けたり。然あれば、忍辱の心を思ふ輩にあらず。然はあれど、日本の國に忍

辱の父母ありと申すによりて、四十人の子どもの悲しく、千人の眷屬の悲しきに

よりて、汝が命を免しをはんぬ。汝速に罷り歸りて、阿修羅の爲に、大般若を

書きて供養せよ。汝日本の父母に向ふべき便を與へむ」といふ時に、俊蔭伏し拜

みて曰く、「日本より山を尋ぬる大なる心ばへは、父母が愛子として、一生に一人

子なり。親のかへりみの厚く、慈悲の深かりしを捨てて、國王の仰の畏かりしに

よりて渡れり。其の父母紅の涙を流して宣はく、汝不孝の子ならば、親に長

き嘆あらせよ、孝の子ならば、あさき思ひのあさきにあひ向へ、と宣ひき。さる

を俊蔭、あたの風、大なる波に逢ひて、おほくの輩を滅ぼして、一人知らぬ世

此為試读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com